



「真」の学びを 育てる教育評価

—子どもの育ちを考える—

Child

Education

森 敏昭

◆広島大学大学院教授

何が子どもの育ちを 促すのか

教育は「教え・育てる」と書く。このことは、「教えることが子どもの育ちを促すのだ」という前提を、多くの人が暗黙のうちに入れていていることの証左といえる。ところが最近、この前提に対する疑念が芽生え始めたようである。確かに今の教育現場には、学級崩壊、学力低

下、不登校、いじめ等々、この前提に疑念を抱かざるを得ないような事例で満ち溢れている。

しかし、少し考えてみれば明らかかなことであるが、もともと「教えることが子どもの育ちを促す」という保証はどこにもない。

なぜなら、「教え」は子どもの「育ち」の必要条件ではあるが、必ずしも十分条件ではないからである。つまり、子どもの「育ち」の必要十分条件は、「教

え」ではなく「学び」なのである。しかも、その「学び」は「真の学び」でなければならぬ。

したがって、「教えることが子どもの育ちを促す」という前提が成立するためには、「教え」が「真の学び」を育むための営みにならなければならないのである。

それでは、「真の学び」とは、いったいどのような学びなのであるのか。

「真の学び」と 葉緑体、捕食、心の成長

人は何のために学ぶのだろうか？ この問いに対する答えは、おそらく「心の成長のため」以外にはあり得ないであろう。

例えば、植物は、種から芽を出し、茎を伸ばし、葉を茂らせ、やがて花を咲かせて実を結ぶ。こうした植物の成長は、葉緑体の働きに支えられている。すなわち、植物は、地中に根を張り、成長に必要な養分（無機物）を

土壌から吸収する。そして、太陽光線を利用して光合成を行い、無機物を有機物に変える。植物の成長は、無機物を有機物に変える、この葉緑体の神秘の働きに支えられているのである。

これに対し、動物は進化の過程で葉緑体を失ったため、自らの体内で有機物を作ることができない。そこで、動物は他の生物を捕食するという生存戦略を採用した。つまり、動物は「食べる」ことによって、成長に必要な養分を摂取するのである。

言うまでもなく、人間も動物の一種に他ならない。したがって、人間も食べることによって成長する。我々人間は、朝昼晩、休むことなく食べ続ける。そうすることによって、生まれたときにはわずか三グラム程度の体重に過ぎなかった赤ん坊も、二十年后には、約二十倍の体重にまで成長するのである。

しかしながら、人間は、植物や他の多くの動物たちとは異なって、体だけでなく心も成長す

る存在である。

それでは、心の成長は何によってもたらされるのであろうか。その答えは、もちろん「学ぶこと」に他ならない。

体の成長が食物を「食べる」ことによってもたらされるのに対し、心の成長は知識や技能を「学ぶ」ことによってもたらされる。しかも心の成長は、生涯にわたって継続する。

生涯学習の重要性が叫ばれる所以は、まさにこの点にあるのである。

以上の説明で明らかによろしく、「真の学び」とは心の成長につながる学びである。したがって、心の成長につながる学びは「無意味な学び」と言わざるを得ない。

では、今の学校では「真の学び」がなされているのであろうか。残念ながら、その答えは「ノー」のようである。

そのことは、冒頭で述べたように、「教えることが子どもの育ちを促すのだ」という暗黙の前提に対する疑念が芽生え始め

たことに、端的に示されている。

そうであるとすれば、今の教育現場に求められていることは、学校を「真の学び」が営まれる場所として蘇らせることである。

そのためには、まず「真の学び」が成立するための条件を明らかにすることから始めなければならぬであろう。

「真の学び」を編み上げる三色の糸

「真の学び」とは、要するに一人ひとりの子どもたちが、それぞれの自己実現を目指して伸びていく、自己形成（自分づくり）の営みに他ならない。そして、その自己形成の過程は、「三色の糸で個性という編み物を編み上げる過程」に例えることができるだろう。

第一の糸は、「情（なまけ）」の赤い糸である。

つまり「真の学び」は本来、子どもたちの情念の世界から湧き上がってくる、「こんなこと

が知りたい」「あんな人間になりたい」「こんなふうに生きたい」などといった思いや願いを原動力にして営まれるべきものなのである。

しかし、思いや願いがいくら強くても、それだけで「真の学び」が成立するわけではない。現代社会に生きる子どもたちは、将来、市民として社会生活を営み、社会の文化的実践に参加しなければならぬ。

したがって、子どもたちは、それぞれの将来に備え、学校での教科の学習を通して、多様な学問的知識の「基礎・基本」を習得しておく必要がある。

つまり、さまざまな教科の学習の奥には、人文科学、社会科学、自然科学など、さまざまな学問の体系、すなわち「理（ことわり）」の体系がある。

これが第二の青い糸（「理」の糸）であり、この青い糸と前述の「情」の赤い糸とを繋ぎ合わせることで、「真の学び」の本質なのである。

学びを編み上げる第三の糸

は、「対話」の黄色い糸である。

自己形成の過程は、自分自身の個性を自覚し、社会の中での自分の居場所を定位置し、他者との関わり合いの中で自己実現を図っていく過程を指している。つまり、人間は他者という鏡に自分の姿を映すことによって自分の個性を自覚する。

したがって、自己形成（自分づくり）のためには、赤い糸と黄色の糸を縫り合わせることで、すなわち、他者に出会い自己に向き合う作業が不可欠なのである。

また、黄色の糸は、赤い糸と青い糸を繋ぎ合わせるための不可欠な要素でもある。なぜなら、社会的存在である人間は、他者と出会い、人の輪（ネットワーク）を作りながら、さまざまな事柄を学んでいくべき存在だからである。

つまり、人間にとつての学びの意味は「心を成長させること」であり、その心の成長のためには、他者との心の交流を通して共に学び合うための、学びのネ

ットワークづくりが不可欠なのである。

したがって、そうした学びのネットワークから切り離された閉鎖的な心は、たちまち頑なになり、やがて心の成長も止まってしまうであろう。

「生きる力」の構成要素

以上に述べてきたように、「真の学び」は、赤・青・黄の三色の糸で個性という編み物を編み上げる作業に例えることができる。しかし、この作業は決して容易ではない。そのためには力が必要であり、それがすなわち「生きる力」に他ならない。では、「生きる力」とはどのような力なのであるか。筆者は、「生きる力」の構成要素は次の四つの力ではないかと考えている。

第一は「I・A M」の力である。

これは自分自身を知る力、すなわち、自分自身の良いところ

も悪いところもひっくり返して、自分自身を受け入れていく力である。言い換えれば、本当の自分自身から目をそらさずにそれを見つめる力、先ほどの例えを用いれば、赤い糸をたぐり寄せる力ということになる。

第二は「I・H A V E」の力である。

本当の自分を見つめることは、私たち大人にとっても、なかなか難しい作業である。したがって、赤い糸をたぐり寄せるためには、対話の黄色い糸とうまく組み合わせていくことが必要になる。そして、そのためには、心の鎧を脱ぎ捨て、他者

に心を開いていくことが不可欠である。

つまり、「自分は独りぼっちではないんだ」「共に学び合う仲間がいるんだ」というように、他者との信頼関係を築き、学びのネットワークを広げていく力が生きていくためには必要であり、その力がすなわち「I・H A V E」の力なのである。

第三は「I・C A N」の力である。

これは要するに問題解決力と言える。人間は日々さまざまな試練や問題に遭遇する。そうした試練を乗り越え、問題を解決していくごとに、人間の心は力

強く、逞しくなっていく。この試練を乗り越え問題を解決していく力が「I・C A N」の力に他ならない。

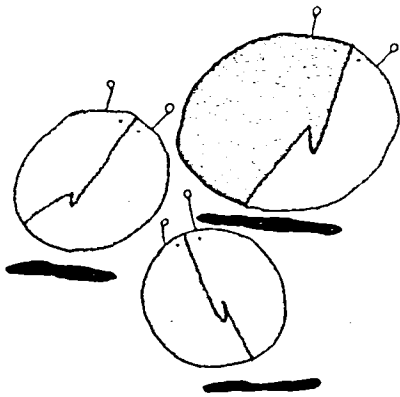
最後は、「I・W I L L」の力である。

これは自分自身で目標を定め、それに向かって伸びていく力である。つまり、「I・W I L L」の力とは、前述の赤い糸（個性化）・青い糸（知性化）・黄色い糸（社会化）のパランスをとりながら、自己形成（自分づくり）の航海の舵取りをする力なのである。

「生きる力」を育むためのカリキュラムとは

学校での学習を「生きる力」を育む「真の学び」として蘇らせるためには、従来のカリキュラム編成の原理を根本から問い直す必要があるのではないだろうか。

従来の教科学習のカリキュラムは、いわばトップダウンの原理に基づいて編成されてきた。



すなわち、各教科の親学問の知識体系の中から基本的な概念・知識を精選し、それを子どもたちにも理解可能な形式に編成し直すという方法が採用されてきた。

つまり、従来の教科学習のカリキュラムは、あくまで親学問の知識体系の基礎・基本なのであり、それが子どもたちの将来とどのような関わりを持つのかという点について、必ずしも十分な配慮がなされているわけではないのである。

もちろん学校教育のカリキュラム編成の場合、こうしたトツブダウンの原理を採用することも、ある程度は止むを得ないであろう。

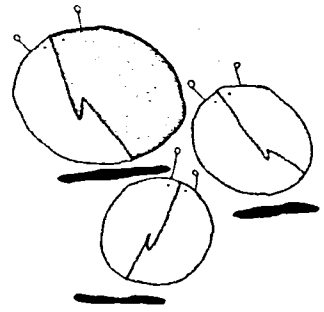
なぜなら、子どもたちが将来必要とする知識・技能は個々さまさまであり、その個々さまさまな将来に備えて、一人ひとりに列々のカリキュラムを準備することは、実現不可能な理想だからである。

また、日進月歩の勢いで技術革新が進む現代社会において、

子どもたちが将来どのような知識・技能を必要とするのかを見通すのは極めて難しいという事情もある。

したがって、学校教育のカリキュラム編成においては、すぐに役立つ知識・技能の学習よりも、むしろ生涯学習につながる基礎・基本の学習が重視されるのは、ある意味で当然の成り行きなのである。

しかしながら、そうしたトツブダウンの原理に基づいて編成された系統学習のカリキュラムでは、それが子どもたちの将来にどのような役立つのかが見え



にくい。

このため、子どもたちは「試験でよい点をとるためだから仕方がない」と、自分自身を無理矢理に納得させる他はない。そして、教師の指導に従って、ひたすら無味乾燥な知識の詰め込みに励むのである。

しかし、自分の将来とどのような関わりがあるのかが見えない学習ほど苦痛なものはない。そのような学習は「学びの意味」が見えないからである。

したがって、これからの学校に求められていることは、学校を「意味ある学び」がなされる

場所として蘇らせることである。

そのために最も重要なことは、「いかに生きるべきか」という個性化（赤い系）のテーマと、「そのためにいま何を身につけるべきか」という知性化（青い系）のテーマがつながるようなカリキュラム編成を工夫することである。

そもそも学びは、これら二つのテーマがつながったときに、はじめて「意味が見える」のであり、そのとき学びは、「生きる力」を育むための「真の学び」になるのである。

新学習指導要領で新たに導入された「総合的な学習の時間（総合学習）」が目指しているものが、正にこの「真の学び」と言えるだろう。

しかし、実施を一年後に控えて、総合学習は「お祭り騒ぎのイベント」と化してしまい、「子どもたちが何を学んでいるのかがわからない」などといった不安や危惧の念があちこちで生じているようである。

この不安や危惧の念が杞憂に
終わり、総合学習が「生きる力」
を育むための「真の学び」とな
ることを心から念願する次第で
ある。

これからの 教育評価のあるべき姿

最後に、そうした「真の学び」
を支援するための評価の在り方
について、若干の私見を述べて
おこう。

従来の教育評価の第一の問題
点は、「教師による他者評価」
が中心であったことである。す
なわち、従来の教育評価では、
相対評価であれ絶対評価であ
れ、評価基準を決める者も評価
をする者も、常に教師であった。
しかも、教師が指導の結果を
振り返って評価するという意味
において、「過去志向」の評価
であった。

しかしながら、教育の本来の
目的は、未来の目標に向かって
伸びていこうとする子どもたち
の自己形成の営みを支援するこ

とに他ならない。

したがって、これからの教育
評価においては、自己形成とい
う視点に立って一人ひとりの子
どもをより深く理解することが
不可欠であり、その深い理解に
基づいて、子どもたちに未来へ
の展望を与えることが大切な
のである。

そうであるとすれば、教育評
価の本来の役割は、決して教師
の価値観を子どもたちに押しつ
けることでも、子どもたちの人
生に点数を付けることでもない
はずである。

自己形成の評価は本来、子ど
もたちの「過去」に対する最終
判定を下すことではなく、子ど
もたちのそれぞれの「未来」に
展望を与え、それぞれの自己形
成のプロセスとしての「学び」
を豊かなものにするために役立
てられるべきなのである。

したがって、これからの教育
評価において教師が果たすべき
役割は、人生の先輩の一人とし
て、「私はこう思うけれど」と、
教師自身の価値観を参考資料と

して呈示することではないだろ
うか。そして、それを参考にす
るかどうかは、あくまで子ども
たち自身の自己評価に委ねられ
るべきである。

従来の教育評価の第二の問題
点は、「知識・理解」中心の画
一的な評価がなされてきたこと
である。

すなわち従来の教育評価で
は、評価の科学性・客観性を重
視するあまりに、子どもたちは
それぞれの未来に向かって、そ
れぞれに個性的な自己形成のプ
ロセスを歩んでいるのだという
明白な事実が忘れられていたの
ではないだろうか。

このため、画一的な評価基準
に基づく評価がなされ、そのこ
とが子どもたちの個性を削ぎ落
とす働きをしてきたのである。

しかし、教育評価は決して鑄
型によって同型の鑄造を作る鑄
物師の技であってはならない。
教育評価の目的は、あくまで子
どもたち一人ひとりの個性を的
確に評価し、それぞれの個性が
それぞれの未来に向かって伸び

ていくのを支援することなので
ある。

したがって、そのためには何
よりもまず教師自身が子どもた
ちの個性を的確に評価するため
の「評価眼」を磨くことが大切
である。

しかし、優れた評価眼は決し
て一夜にして身につくものでは
ない。的確な評価眼を身につけ
るためには、教育経験の豊富な
教師や専門家の意見を参考にし
て自分の評価を見直したり、場
合によっては子どもたちによる
自己評価と照合することによつ
て、評価の妥当性と信頼性を高
めるなどの工夫も必要になるで
あろう。

また、個々の教師が日頃から
評価の原理や方法についての理
解を深め、評価眼を磨くための
自己研鑽に努めるとともに、校
内研究・研修の在り方の見直
し・改善を図ることによって、
学校全体としての評価の力量を
高めることも重要である。